

ロバート・バートンのルクレティウス受容 ——『メランコリーの解剖』第一部にみる感情解剖の詩学

榊原 知樹

17世紀イギリスのロバート・バートン（Robert Burton, 1577-1640）が著した『メランコリーの解剖』（*The Anatomy of Melancholy*, 1621）は、メランコリーの原因・症状・治療法を網羅的に論じた百科全書的著作である。本書は古典古代から中世・ルネサンスに至る膨大な文献の引用・借用によって構成されており、そのモザイク的文体は本書の最も顕著な特徴の一つをなしている。なかでも古代ローマの詩人ルクレティウス（Titus Lucretius Carus）の『事物の本性について』（*De Rerum Natura*）は、バートンが繰り返し参照した古典テキストであり、彼がこれを精読していたことはすでに明らかにされている。しかし、引用された詩句が『メランコリーの解剖』のなかでいかなる文脈に再配置され、どのような機能を担っているかについては、なお十分に検討されていない。

本論考では、『メランコリーの解剖』第一部に現れるルクレティウス引用を対象とし、その再配置のあり方と詩学的機能を考察する。とりわけ、バートンがルクレティウスの詩的イメージやリズムを選択的に取り込み、メランコリーをめぐる感情運動を描き出すレトリックとして再機能化していることを論じる。バートンにおける引用は、古典的権威の援用や博識の誇示ではなく、読者の感情を揺り動かし、精神の運動を転調させる治療的装置として理解できることを示す。

1. メランコリーと精神の運動

バートンはメランコリーを「原因のない恐れと悲しみ」を伴う精神の攪乱として定義し、その中心に *phantasie* の働きを置く。空想力は現前しない対象のイメージを生み出し、それを反復・増殖させる働きを有するが、制御を失うと同一の感情や観念の内部を循環し続け、精神を自己閉鎖的状態へ導く。したがってメランコリーの治療とは、新たな知識を与えることではなく、停滞した精神を再び運動させることである。このような精神観に立つバートンは、怠惰（*idleness*）を最大の原因とし、「思考をそらし（*divert his thoughts*）」「精神を絶えず活動させる（*in perpetuall action*）」ことを治療原理として説く。

この観点から見ると、『メランコリーの解剖』の引用実践も、単なる知識の集積や古典的権威の援用としてではなく、精神の運動を組織する技法として理解できる。引用は読者を一つの思考や感情に留めるのではなく、異なるイメージや声へと絶えず導くことによって、精神を固定状態から解放し放つ働きを担う。本論では、メランコリーの原因と症状を論じる第一部に現れる主要なルクレティウス引用を分析対象とする。以下では、それらの引用が原典からどのように再配置され、新たな機能を与えられているかを検討する。

2. ルクレティウス引用の再配置

第一部においてバートンは、快楽、人間存在の脆弱性、野心、名誉欲、恐怖、生の嫌悪を論じる場面で、ルクレティウスの詩句を繰り返し引用している。しかし、それらは原典の哲学的文脈を保持したまま引用されるのではない。バートンは原典を忠実に再現するのではなく、それぞれの詩句がもつ比喩や情動の力を抽出し、新たな文脈へと組み込むことで、メランコリーをめぐる感情運動を描き出す詩的資源として再機能化している。

「一時的なメランコリー」を論じる第1部第1節第1項第5小節では、ルクレティウスの「飲みの泉のただから、何か苦いものが立ち上がる」（*medio de fonte leporum... surgit amari aliquid*; DRN 4.1134-35）が引用される。原典では恋愛欲望の内部に潜む苦痛を表すこの詩句は、バートンにおいては人間存在そのものにおける快楽と苦痛の交錯を表すイメージへと転換される。また、心労や現世への不満を扱う第1部第2節第3項第10小節では、人間誕生を「難破した裸の水夫」（*navita nudus*）になぞらえる比喩（DRN 5.222-23）が、人間誕生を論じる文脈から離れ、メランコリーにさらされた人間存在の脆弱性を象徴するイメージとして再配置される。

さらに、欲望、とりわけ野心を扱う第1部第2節第3項第11小節では、ルクレティウスのシーシュポスの比喩や「彼らは常に黙し、悲しげに立ち去っていく」（*semper victus tristisque recedit*; DRN 3.997）が、終わりにく野心に駆り立てられる精神の自己消耗を描くために用いられる。続く自己愛・名誉欲を論じる第1部第2節第3項第14小節では、哲学的探究のために「静かな夜を眠らず過ごす」（*et inducit noctes vigilare serenas*; DRN 1.142）という詩句が、栄光を追い求める欲望によって眠ることのできない精神状態を表すものへと読み替えられている。

恐怖を扱う第1部第2節第4項第3小節では、「子どもが暗闇を恐れるように」（*veluti pueri... in tenebris metuunt*; DRN 2.55-56）という比喩が、無知を批判する文脈から離れ、想像力によって増幅される不安や恐れ of the 心理を描くために用いられる。最後に、メランコリーの予後を論じる第1部第4節第1項第1小節では、「死への恐怖ゆ

えに生への嫌悪が人間を捉える」 (*mortis formidine vitae / percipit humanos odium*; DRN 3.79–80) という詩句が、死の克服を説く哲学的議論から切り離され、メランコリーが絶望や自己破壊へと向かう感情運動を感覚的に表現するために援用される。

このように、バートンはルクレティウスの詩句を原典の思想的文脈から切り離し、快楽、人間存在の脆弱性、野心、名誉欲、恐怖、生の嫌悪という六つの局面へ再配置している。各引用は原典とは異なる心理的文脈に置き直されることで、メランコリーの諸相を描く役割を担っている。

3. 感情解剖の詩学

本論でいう「感情解剖の詩学」とは、引用の連鎖を通して感情の生成・増幅・転調を構成する表現原理を指す。バートンは恐怖や欲望を説明するだけでなく、それらが別の感情へ移行していく運動そのものをテキスト上に組織する。その意味で、ルクレティウスの引用は感情の対象ではなく、感情運動を組織する詩的装置として機能している。

その際、引用は論証を補強する権威としてよりも、読者の感情を直接揺り動かすレトリックとして機能する。快楽の内部から苦痛が立ち上がる瞬間、難破した水夫の孤立、終わりなく野心に駆り立てられる人間、不眠の夜、暗闇に怯える子ども、そして死への恐怖から生そのものを憎む精神——これらはすべて、メランコリーを説明するための言葉ではなく、その感覚的現実を読者に経験させるための詩的イメージとして配置されている。引用によって読者の感情は絶えず別の対象へと導かれ、一つの情念に固定されることなく運動を続けるのである。

この特徴は、『メランコリーの解剖』全体の構成とも対応している。バートンのテキストは、引用・借用・逸脱・連想を重ねながら、読者の思考を一方向へ収束させるのではなく、多方向へ展開させるモザイク的構成を採る。ルクレティウス引用もこの構成を支える重要な要素として機能し、感情運動を絶えず組み替えることによって、読むという行為そのものを治療的経験へと転換していると考えられる。

4. 結びにかえて

本論考では、『メランコリーの解剖』第一部におけるルクレティウス引用を分析し、その受容の特徴について考察した。第1に、バートンはルクレティウスの詩句を選択的に切り取り、新たな文脈へ再配置することによって、その機能を変化させていた。第2に、その再配置は、快楽、欲望、野心、恐怖、絶望といった感情運動を描き出す方向へ一貫して行われていた。第3に、ルクレティウスからの引用は古典的権威を示すための装飾ではなく、読者の感情や思考を転調させる詩的・治療的レトリックとして機能していた。

このような引用実践は、古典受容を「影響」や「典拠」の問題として捉えるだけでは十分ではないことを示唆している。バートンにおいて古典テキストは固定した意味を継承する対象ではなく、読者の精神を動かすために再編成される詩的資源として機能する。この観点から見ると、『メランコリーの解剖』のモザイク的構成は、古典の断片を集積した博識の表現ではなく、引用の連鎖を通して感情を組織し、読者の精神を動かす「感情解剖の詩学」として理解することができる。

参考文献

- Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy*. Ed. Thomas C. Faulkner, Nicolas K. Kiessling, and Rhonda L. Blair. 6 vols. Clarendon Press, 1989–2000.
- Gillespie, Stuart. “Lucretius in the English Renaissance.” *The Cambridge Companion to Lucretius*. Ed. Stuart Gillespie and Philip Hardie. Cambridge UP, 2007. 239–56.
- Gowland, Angus. *The Worlds of Renaissance Melancholy: Robert Burton in Context*. Cambridge UP, 2006.
- Kiessling, Nicolas K. “Two Notes on Robert Burton’s Annotations: His Date of Conception, and a Fragment of Copy for *The Anatomy of Melancholy*.” *The Review of English Studies*, n.s., vol. 36, no. 143, Aug. 1985, pp. 375–79.
- Lucretius. *De Rerum Natura*. Ed. Cyril Bailey. 3 vols. Clarendon Press, 1947.
- Lund, Mary Ann. *Melancholy, Medicine and Religion in Early Modern England: Reading The Anatomy of Melancholy*. Cambridge UP, 2010.
- Sakakibara, Tomoki. *Melancholy and Mosaic Style: Robert Burton’s Therapeutic Writing Seen through Seneca*. Eihōsha, 2025.

謝辞

本研究は JSPS 科研費 24K16019 の助成を受けたものです。